

学校施設・緑地の公園的利用に関する研究

——アーバン・オープンスペースのオープン性について——

趙 庸祺・吉田 鐵也

The study on common public use of school
facilities and open-space

——On the openness of urban open-space——

Yong-gi CHO and Tetyuya YOSHIDA

要 旨

地域住民の生活圏である近隣住区において、学校空間は公共オープンスペースとして地域のためにいかなる役割を果たすべきであろうか。本研究では京阪神の8校区を対象とし、「学校公園」に対する意識、利用実態、イメージ評価などを居住環境施設整備の観点から調査・分析を行った。その結果、次の諸点が明らかにされた。

1. 外部空間に対するイメージ評価は、敷地境界の類型（開放型、透視型、閉鎖型）によって大きな差が認められた。

2. イメージ評価に働く被験者属性の中、「年齢」・「居住圏域」はほとんど相関関係がなく、「性別」・「利用経験」は、かなり高い正の相関関係が認められた。また、「居住歴」では、いくつかのイメージ次元において相関性が見られた。

3. 全イメージ次元間の相関分析と因子分析により、地域住民が学校空間に対して親しみを感ずる要因としては、その外部空間の質・量的イメージより、オープン性によるものが多いことが明らかにされた。

4. 学校空間の公共オープンスペースとして果たすべき役割は、近隣住区の類型（住宅団地型と旧市街地型）の間で多少異なることが分析された。

は じ め に

最近、居住環境施設（教育・文化施設、スポーツ・レクリエーション施設、各種福祉施設など）の整備に対する住民側の要求が一段と高まってきている。しかし、大都市におけるオープンスペースの不足や施設整備のための用地取得の困難は、近年一層深刻となっている。

このような社会的背景から、公共オープンスペースのあり方について、都市デザインのレベルで、様々な論議がなされている。すなわち、オープンスペースとは都市計画的意味において、“建蔽されない永続的な空間である”という従来までの一般的な定義が疑問視され、最近では、単に物理的に“OPEN”か“CLOSE”かというのではなく、利用面においてオープンであるべきであるという主張が出されるようになった¹⁾²⁾。

そこで本研究では、公共オープンスペースの代表的なものとして学校空間を取り上げ、その物理的オープンと利用面のオープンが持つ意義を居住環境施設整備の観点から検討することにする。

調 査 の 概 要

調査対象地区を選定するにあたって、まず地図や他の資料による予備調査を行い、最終的には京阪神における地域類型・学校施設の外部空間構成の異なる8ヶ所が選ばれた。対象校及び校区の主な特性は表1に、校区の概況は図1に示す。

表1 調査対象校及び学区の主な特性

	土地利用用途地域	地 域 特 性	面積	開校年度	敷地面積
S学区 学 校	第1種住居専用地域	すぐ東に河川緑地があり、 静かな住宅地である。	42 (ha)	昭16	11,800 (㎡)
H "	第2種住居専用地域	高層集合住宅（11階建て） の新興住宅団地である。	34	昭58	14,000
N "	準工業地域	住・商・工が混合された古い 密集市街地である。	20	明 2	6,000
T "	住 居 地 域	“学校公園”構想を基にし た典型的な一近隣住区	96	昭48	15,100
I "	住 居 地 域 商 業 地 域	駅を中心に商・住が混合さ れ、通過交通が多い。	158	昭 6	21,600
B "	第2種住居専用地域 住 居 地 域	東半分は工業地区で、中・ 高等学校が2つずつある。	92	昭32	12,000
M "	第1種住居専用地域	大規模ニュータウンの一部 であり、緑地が豊かな方	80	昭42	24,000
Ik "	住 居 地 域	古い一戸建て住宅地の中に 高層集合住宅群が混在	35	昭34	13,400

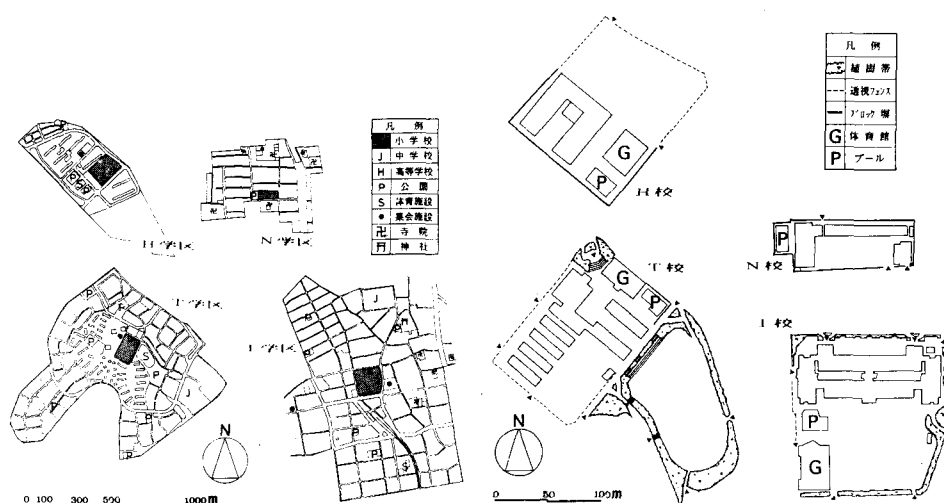


図-1 学区の概況図（施設配置）

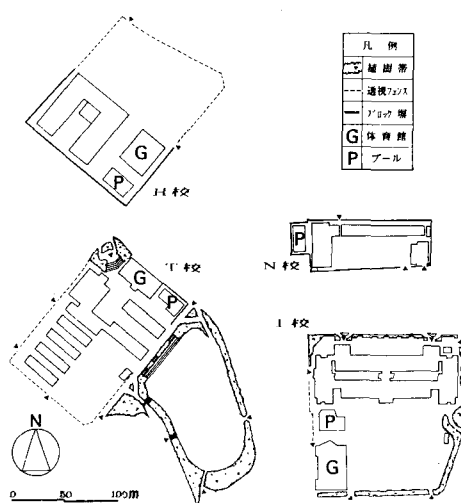


図-2 外部空間の構成

1. フィールド調査

(1) 調査方法

校区の概況及び学校施設の外部空間については、都市計画図 (1/2, 500)・住宅地図 (1/1, 200) を基に現地調査を行った。

(2) 外部空間の類型

調査対象校における外部空間の構成形態は、図-2に示す。外部空間の類型としては、敷地空間の物理的オープン性によって開放型、閉鎖型、透視型に分けられる。

- ・開放型：敷地境界が主に樹木を用いて構成され、24時間進入可能な形 (T, I 校)。
- ・閉鎖型：従来の学校建築にみられるようなブロック塀で囲まれ、人の出入りは勿論、視覚的にも遮断された形 (S, N, Ik 校)。
- ・透視型：敷地境界を金網のフェンスで囲み人の出入りは制限されているが、視覚的には遮断されていない形 (H, B, M校)。

2. アンケート調査

(1) 調査方法

調査対象者は、当該学校から居住地までの距離 (居住圏域) を考慮し、選挙人名簿と住宅地図により、ランダムに100—200人ずつを抽出した上、留置法によって調査を依頼した。

調査期間は、S・H・N学区が1987年9月、T・I・B学区が1988年1月、M・Ik学区が1988年4月である。回収率は学区によってかなりの差 (max. : 84.4%, min. : 60.4%) があり、全体的には72.7%である。

回答者の属性は表-2の通りであり、性別には女性の方がやや多く (54.0%)、年齢構成では50代が他年齢層の約8割ぐらいにとどまっている。

(2) 調査項目

調査項目は、a. 被験者の属性 (5項目)、b. オープン利用の程度、c. オープン利用の必要性、d. オープン利用による効果 (5項目)、e. 外部空間のイメージ評価 (10項目)、f. フリーアンサー、とした。

表2 被験者属性のクロス集計

		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)
学 区	S	75																										
	H		72																									
	N			81																								
	T				147																							
	I					69																						
	B						61																					
	M							103																				
	Ik								83																			
性 別	男	(9)	33	30	41	52	29	22	42	38	287																	
	女	(10)	42	42	38	94	39	38	61	45	399																	
	20	代	(11)	21	24	22	39	15	13	26	12	70	98	172														
	30	代	(12)	18	21	27	45	18	15	29	18	76	115	—	191													
	40	代	(13)	23	19	20	35	20	18	24	26	70	115	—	—	185												
年 齢	50	代	(14)	13	8	12	28	16	15	24	27	71	71	—	—	—	143											
	A	zone	(15)	20	19	20	42	17	16	26	24	75	107	38	58	46	42	184										
	B	"	(16)	22	17	25	34	16	17	28	21	76	103	46	54	44	36	—	180									
	C	"	(17)	13	15	20	33	18	14	24	17	66	87	39	37	44	34	—	—	154								
	D	"	(18)	20	21	16	38	18	14	25	21	70	102	49	42	51	31	—	—	173								
居住歴	5	年未満	(19)	10	24	8	18	16	15	28	12	53	76	57	45	16	13	43	33	23	32	131						
	10	年 "	(20)	7	47	4	25	12	17	14	7	53	79	27	52	42	12	27	34	29	39	133						
	20	年 "	(21)	22	1	8	104	18	11	40	19	97	106	41	48	80	54	56	57	49	61	—	223					
	20	年以上	(22)	36	0	61	0	23	18	21	45	97	106	47	46	47	64	58	52	53	41	—	—	204				
	在住																											
在学子供の有・無	い	ない	(23)	51	31	51	91	46	47	63	56	181	252	157	79	79	121	112	121	99	104	90	65	123	158	436		
	小・中	学生	(24)	22	38	28	56	20	12	35	24	94	141	11	107	102	15	65	56	51	63	25	67	99	44	—	235	
	な		(25)	15	18	19	36	22	27	44	29	98	111	68	44	16	52	58	52	49	51	50	40	61	59	173	31	210
	行事	だけ	(26)	31	37	28	41	27	13	22	24	98	125	67	66	47	43	56	50	48	69	47	46	66	64	133	85	223
	スポーツ、文化		(27)	29	17	34	70	20	21	37	30	91	163	37	81	92	48	70	78	57	53	34	47	96	81	130	119	258

結果分析及び考察

1. 外部空間に対するイメージ評価

本調査では、前述のように地域特性・空間のオープン性の異なる小学校区が調査対象地として選ばれた。それから、被験者の選定に当たっては、より信頼性があり、妥当なデータを集めるために、学生・専門家などの代理集団を用いることを避け、実際の利用者、あるいは、地域住民に限定した。

イメージ評価においてはSD法³⁾ (Semantic Differential Method) を用い、10のイメージ次元を各々、5段階の尺度に評価してもらった。本稿では、空間のオープン性（物理的オープン、利用面でのオープン）がイメージ評価に与える影響や各イメージ次元間の相関関係を「親しみやすさ」を中心に分析する。

(1) 空間のオープン性がイメージ評価に与える影響

・外部空間の物理的オープンとイメージ評価との関係

8つの外部空間に対するイメージ評価の平均得点を表-3に示す。表-3によると外部空間の敷地境界が開放型であるT、I校が非常に良いイメージを、閉鎖型であるS、N、Ik校がよくないイメージを与えている傾向が著しいことがわかる。

表3 各イメージ評価の学区別平均得点及び順位

学 区	S	H	N	T	I	B	M	Ik
緑の多い	2.757(6)	2.824(5)	1.975(8)	4.014(1)	3.212(3)	2.571(7)	3.663(2)	2.986(4)
活気のある	3.043(6)	2.941(7)	2.286(8)	3.919(1)	3.412(3)	3.164(4)	3.280(2)	3.162(5)
新しい	3.205(5)	4.432(1)	1.588(8)	4.149(3)	4.250(2)	3.509(4)	3.020(7)	3.041(6)
親しみやすい	3.056(6)	3.000(7)	2.885(8)	3.754(1)	3.460(2)	3.321(3)	3.220(5)	3.243(4)
ひろい	3.452(2)	2.868(6)	1.650(8)	4.028(1)	3.167(4)	2.393(7)	3.158(5)	3.267(3)
開放的な	2.959(7)	3.074(6)	2.560(8)	4.042(1)	3.645(2)	3.236(4)	3.313(3)	3.095(5)
明るい	3.438(5)	3.433(6)	2.532(8)	4.257(1)	4.000(2)	3.643(3)	3.470(4)	3.370(7)
すがすがしい	3.397(4)	3.254(7)	2.738(8)	4.079(1)	3.692(2)	3.321(6)	3.371(5)	3.405(3)
洗練された	3.041(6)	3.044(5)	2.558(8)	3.664(2)	3.712(1)	3.071(4)	3.123(3)	2.919(7)
豊かな	2.236(4)	3.000(7)	2.873(8)	4.035(1)	3.849(2)	3.196(5)	3.268(3)	3.122(6)

特に、四面がブロック塀に囲まれているN校は、すべてのイメージ次元において一番低い評価が与えられている。それから、外部空間のデザインにおいて公園・スポーツ広場と一体化されたT校の場合は、H校に較べて、同じ団地型でほぼ同年代にできたものであるにもかかわらず、イメージ次元「新しい」を除いてはすべてにおいて前者の方が高い評価を得ている。

I校の場合は、ほとんどのイメージ次元においてT校につづく良いイメージを、特に「洗練された」については一番高い得点を示している。これは、開放型でありながら、敷地境界に樹木・彫刻などを用いた「洗練さ」が評価されたことに起因するものと解釈される。

以上のことから、外部空間の物理的オープン、すなわち、公園・スポーツ広場との一体化や敷地境界の公園化が地域住民の学校空間に対するイメージ評価において、よい方向への働きをしている傾向が表れた。

・利用面のオープンとイメージ評価との関係

SD法によって調査されたイメージ評価に働いている地域住民の属性を把握するために、10のイメージ次元と被験者属性間の相関分析を行った（表-4）。表-4によると、属性の中、「性

表4 各イメージ次元の評価スコアと被験者属性との相関関係

	性別	年齢	居住圏域	居住歴(1)	(2)	子供	利用経験
緑の多い	.15***	-.02	-.08*	-.21***	-.01	.15***	.16***
活気のある	.12**	-.01	-.04	-.16***	.04	.04	.14***
新しい	.11**	.03	-.01	-.34***	-.01	-.08	.04
親しみやすい	.13***	.01	.01	-.03	.12**	.16***	.22***
ひろい	.14***	.07	-.01	-.20	.02	.10*	.16***
開放的な	.14***	.03	.01	-.12**	.09*	.08	.15***
明るい	.10*	.05	.01	-.15***	.10**	.06	.14***
すがすがしい	.12**	.03	.01	-.16***	.05	.08	.16***
洗練された	.08*	.09*	-.01	-.10*	.08*	-.01	.06
豊かな	.10*	.02	.01	-.05	.07	.01	.09*

*p<.05; **p<.01; ***p<.001

All other unstarrrted coefficients p>.05 (no significant)

別」と「利用経験」がイメージ評価に高い正の相関関係を表している。つまり、性別では男子より女子の方が高い評価を、利用経験別には「積極の利用」・「消極の利用」・「無利用」集団の順に高い評価をしていることになる。これは、図-3においてもその差がはっきりと表れている。

それから、「年齢」・「居住圏域」とイメージ評価の間には、ほとんど相関関係が認められない。「年齢」ではイメージ次元「洗練された」についてだけ、比較的高い正の相関関係(0.09; p<0.05)で、高年齢であるほど「洗練さ」を認めているといえる。「居住圏域」の場合は、「緑の多い」についてだけ高い負の相関関係が表れ、居住圏域の遠くなるほど、緑の少ないイメージがあることと分析された。

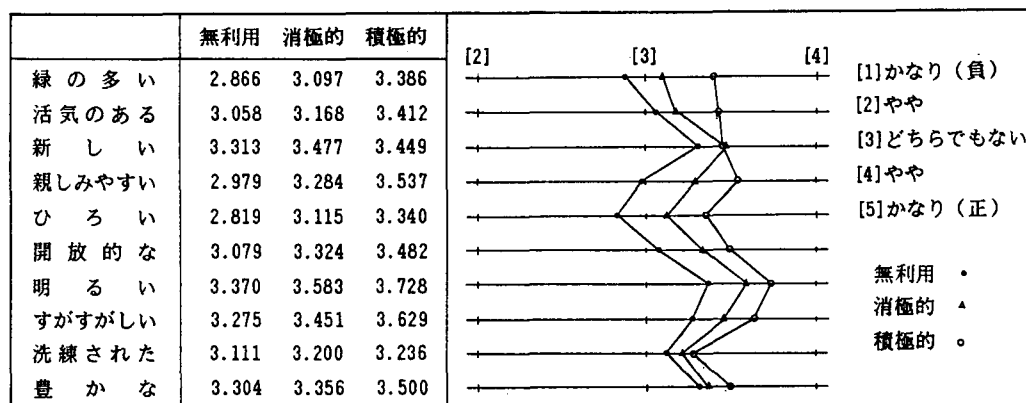


図-3 利用経験別におけるイメージ評価の差

居住歴(1)では、すべてのイメージ次元に対してかなり高い負の相関関係を表し、長い居住歴を持つ人ほど全イメージ次元に対して低い評価をしていることになる。

しかし、これは絶対的居住歴を変数として用いたためであるので、一般的傾向であるとはいえない。そこで、各地区別に相対的居住歴(4段階)を求め、それを変数として分析を行ったのが居住歴(2)である。居住歴(2)では、ほとんどのイメージ次元に対して正の相関関係が表れ、長い居住歴を持つ人ほど、「親しみやすい」・「開放的な」・「明るい」・「洗練された」ものとして認識していることがわかる。

(2) 「親しみやすい」と他のイメージ次元との関係

各イメージ次元間における評価スコアの相関関係は表-5の通りであり、全体45個の相関係数

表5 各イメージ次元間における評価スコアの相関関係

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
緑の多い(1)	—									
活気のある(2)	.50	—								
新しい(3)	.31	.41	—							
親しみやすい(4)	.37	.51	.30	—						
ひろい(5)	.50	.46	.42	.36	—					
開放的な(6)	.41	.51	.37	.58	.50	—				
明るい(7)	.46	.57	.5	.57	.53	.67	—			
すがすがしい(8)	.46	.53	.46	.53	.52	.57	.77	—		
洗練された(9)	.31	.38	.46	.32	.39	.40	.51	.53	—	
豊かな(10)	.40	.46	.41	.41	.46	.45	.61	.59	.60	—

All of the correlations are significant at the 0.1 % level

が高い正の相関関係 ($P < 0.001$) を表している。本稿では「親しみやすい(4)」を中心に分析する。「新しい(3)」及び「洗練された(9)」は他のイメージ次元より低い相関性を示し、「開放的な(6)」, 「明るい(7)」, 「すがすがしい(8)」, 「活気のある(2)」の順に高い相関性を示している。

それから、全イメージ次元に対する評価結果を少数の因子で説明し、全体の判定構造を知るために因子分析を行った(表6)。その結果、高い因子負荷量をもつイメージ次元群で構成される3つの因子が抽出された。第Ⅰ因子は、敷地境界の物理的開放に関わるオープン性として、第Ⅱ因子は外部空間の質的な側面によるものとして、第Ⅲ因子は外部空間の量的な側面によるものとして、各々意味づけることができる。この中で、「親しみやすい」は、「開放的な」, 「明るい」, 「すがすがしい」, 「活気のある」の敷地境界のオープン性に関するイメージ次元と同じく第Ⅰ因子に、一番高い付加量を持つイメージ次元として分類される。

以上のことから、地域住民が「学校」に対して親しみを感ずる要因としては、その外部空間の質・量的イメージよりもオープン性によるものが多いことと分析された。

2. 地域社会における学校施設・緑地の役割に関する意識構造

(1) オープン利用の必要性について

図4は、学校施設を自校の児童・生徒だけでなく、地域住民のスポーツや文化活動に利用させることがどう受け止められているかを示したものである。学区別には、N・Ik・T・S学区の順に肯定度が高く、H学区の場合は「必要である」と回答した者は45.1%にすぎなかった。肯定度の高い学区の中、N・Ik・S学区は旧市街地にある。周辺に公園や運動広場などの公共緑地の整備が立ち遅れている所であり、敷地境界が閉鎖型であることからオープン利用が強く要求されていると考えられる。

それから、T学区の場合は、いわゆる「学校公園」の構想の基にあらかじめ、学校空間と公園

表6 各イメージ次元における因子分析の結果

	等Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
親しみやすい	0.856	0.133	0.133
開放的な	0.750	0.250	0.268
明るい	0.662	0.505	0.268
すがすがしい	0.591	0.526	0.284
活気のある	0.542	0.237	0.499
洗練された	0.180	0.826	0.119
新しい	0.157	0.699	0.217
豊かな	0.334	0.696	0.235
緑の多い	0.214	0.136	0.861
ひろい	0.236	0.365	0.682
固有値	2.646	2.476	1.820
説明率(%)	38.1	35.7	26.2
推定因子名	オープン性 「Quality」 「Quantity」		

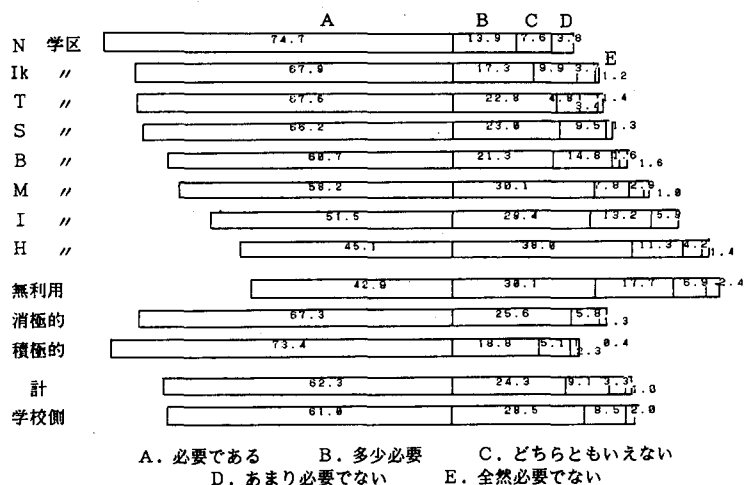


図-4 オープン利用の必要性について

・運動広場がデザイン、機能の面で一体化された所である。実際にオープン利用がかなり活発にされており、その必要性・当然性についての高い肯定度の表れであると解釈される。

反面、H学区は市街地周辺の新住宅団地であり、公園や運動広場などの公共緑地が学校空間と隣合っていることはT学区と同じであるが、オープン利用の要求度は一番低い。これは、両方の空間がデザイン的に分離されて、お互いに別々の機能を果たしていることに加えて、まだコミュニティ意識が成熟していないことがその原因として考えられる⁵⁾。全体的には、学校施設の公園的利用について、「必要である」・「多少必要」という答えが86.8%を示し、かなりの人がその必要性を感じている。これは、前回調査⁴⁾の学校責任者とはほとんど同じぐらいである。

(2) オープン利用による効果について

表-7は、学校施設・緑地のオープン利用による効果についてどのぐらい肯定的な考えを持っているかを学区別に示したものである。全体的に、「子供の安全な遊び場が提供できる (E1)」, 「地域住民に身近なレクリエーションの場が提供できる (E2)」, 「地域住民のコミュニケーションの場になり得る (E3)」, 「すでにある施設の効率的な活用ができて、自治体の財政上においても経済的である (E5)」, 「地域住民と学校との一体感が増大される (E4)」の順に肯定度が高いが、いわゆる団地型 (H, T, M学区) では「E1」より「E2」の方が高く評価されている。つまり、新しい住宅団地の場合は、児童公園・プレーロットなどの整備が進んでいるので、子供

表7 各学区におけるオープン利用の効果の得点平均と順位

	S学区	H	N	T	I	B	M	Ik
E1	4.480 (1)	4.323 (2)	4.638 (1)	4.600 (2)	4.681 (1)	4.656 (1)	4.431 (2)	4.419 (1)
2	4.467 (2)	4.357 (1)	4.494 (2)	4.621 (1)	4.343 (2)	4.344 (2)	4.466 (1)	4.363 (2)
3	4.176 (3)	3.947 (3)	4.150 (3)	4.455 (3)	4.104 (3)	4.250 (3)	4.265 (3)	4.313 (3)
4	3.773 (5)	3.690 (5)	3.513 (5)	3.869 (5)	3.627 (5)	3.787 (5)	3.738 (5)	3.889 (5)
5	3.933 (4)	3.814 (4)	3.924 (4)	4.182 (4)	4.000 (4)	3.803 (4)	3.939 (4)	4.075 (4)

E1 子供の安全な遊び場が提供できる

E2 地域住民に身近なレクリエーションの場が提供できる

E3 地域住民のコミュニケーションの場になり得る

E4 地域住民と学校との一体感が増大される

E5 施設の効率的な活用で、自治体の財政上においても経済的である

表8 フリーアンサーの分析

1. 管理・運営システムの改善	(人)
・利用手続 利用手続を簡単にして、多くの人が楽しめるよう	15
時間の取り合いで対抗意識が生じる	2
・プログラムの充実 高齢者のためのプログラムがほしい	7
生涯教育に基づいた本格的な運営を望む	3
放課後の学童保育プログラムがほしい	3
先生のボランティア活動がほしい	2
・利用時間帯 夏休みにプールをもっと開放してほしい	7
当直管理者がいて、常時利用できるように	3
・その他 利用は喜ばしいが、学校に迷惑のかからないように	14
利用者の固定（独占）化が見られる	9
事故の責任所在を確実に	4
費用は受益（利用）者負担にするべきである	2
公民館など他の公共施設に比べて気楽さがない	1
2. 施設条件の改善	
・施設の拡充 住民利用にふさわしい施設づくりを	4
現在、講堂しかないので、専用体育館があれば	3
・既存施設の開放 図書館の開放で親子で学習できるように	2
学生数の減少による遊休施設の効率的利用	1
3. 反対・苦情など	
騒音が大きく、周辺住民にたいへん迷惑	3
学生や学校関係者が利用してこそ、良き効果が期待できる	1
利用側のモラル、学校側の開放体制など問題点が多すぎる	1

の遊び場としての役割よりもむしろ大人の身近かなスポーツ・レクリエーションの場としての役割が期待されていることとなる。

む す び

閉鎖的学校から開放的学校へという学校管理者側の意識変化がかなり進んでいることは既に報告されている、本調査では学校空間の公園の利用に関する地域住民の意識構造が明らかにされた。今後、在学児童の減少による学校施設の遊休化、週二日休日制による余暇の増大、レクリエーション・生涯学習の欲求が進むにつれ、地域住民の学校空間に対する公園的役割の要求は、一層大きくなると考えられる。

学校施設を住民利用のためにオープンしてゆこうとする際に、その対象としては屋外運動場、体育館、水泳プール、図書室や会議室、家事室、音楽室などの特殊教室等、様々な施設が考えられる。しかし、最も要望があり、また運営・管理においても、容易である施設という観点からみると、その主軸となるのは現在のところでは、スポーツ関連施設であろう。したがって、その成果の行方が学校公園理念の実現に重要なカギを握っているといえよう。学校施設開放事業が国の施策としてはじめられてから20年程たっている現在、国内でも若干のすぐれた例がみられるが、他の殆どはまだ極めて貧弱な状態であり、学校が真に地域住民のためのものとして定着するには様々な問題点があると思われる。

ここでは、本調査の結果分析を踏まえて、現行の学校開放が学校公園へ躍進するために、当面乗り越えなければならぬ幾つかの問題を取り上げることとする。

空間計画的側面 立地条件の選択や施設の空間計画において、一般の人々が近づきやすく、使いやすい施設環境のうえ、学校専用部分、コミュニティ・サービス部分、兼用部分などの明確なゾーニングで、管理・利用の便を図ることが大切である。

管理・運営の組織的側面 放課後、休日にオープンされる施設を管理・運営する事は責任者にとって過重な負担となり、本来の学校組織とは別の管理スタッフ、指導者の存在が必ず必要と

なる。また実際の運営に当たっては、地域住民の代表や利用グループの代表も含んだ運営委員会が組織され、この委員会が様々な企画を行ったり、地域と学校との連携につとめ、運営を円滑に推進させるべきである。学校側と地域の住民とが計画の段階から管理・運営に至るまで強力な協力体制を組むことが絶対の要件である。

財政的側面 理想的な共同利用は共同出資から始まるのである。空いている施設を要求されれば開放するという形では、住民利用に限界があり、その成果はあまり期待できない。学校開放が学校の本来目的である生徒教育を阻害させるという非難も浴びているが、その理由の一つは運営構造において、地域利用のための資金が用意されず、学校運営資金の一部から調達されているからであろう。共同利用を前提とした共同出資があつてこそ、学校側も地域側も単独ではもつことのできない施設が所有できるようになるのではないか。

最後に、本調査研究に当たり、関連資料、情報等を御提供下さった京都市、大阪市、吹田市、神戸市、伊丹市、尼崎市の教育委員会の関係各位や快よく回答して下さいった各学校の方々や住民の方々に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) Lynch, K. : A theory of good city form. MA: MITpress. 1981
- 2) Mark, F. : Advances in Environment, Behavior and Design. 76-77, 1987
- 3) 岩下豊彦: S D法によるイメージの測定. 川島書店. 東京. 1985
- 4) 趙 庸祺: 居住環境施設整備の観点から見た「学校公園」に関する考察. 造園雑誌. 49(5). 311-316, 1986
- 5) 趙 庸祺: 学校施設・緑地の公園の利用に関する地域住民の意識構造について. 日本造園学会関西支部大会. 1987

Résumé

What role should the school institutions and their open-spaces play within the daily lives of the inhabitants of neighborhood communities? In this study, the general consciousness of the idea "Educatoinal Park" and the actual use by the common public of school facilities, was surveyed and analysed with regard to community facilities improvement.

The results of this study are as follows ;

- 1) Image evaluation concerned with outside space was differed depending on the type of site-boundary.
- 2) In the correlation analysis between the subject's attribute characteristics and their image evaluation, it was shown very low correlated to "age" and "range of residence", Whereas "sex" and "use experience" correlated closely in positive direction with image evaluation.
- 3) It became clear that, among characteristics of the school facilities, their openness, had predominance over other qualitative and quantitative factors, as far as the residents' perception of these as "familiar space" was concerned.
- 4) the role of the school facility as public open-space was somewhat different depending on the type of neighborhood communities.